

## 「ちぐさ」の親父 吉田衛 横浜昔ばなし



ちぐさアーカイヴ・プロジェクト監修 柴田浩一



Mamoru Yoshida

「ちぐさ」の親父、吉田衛は、外国人居留地に住んだこともあって横浜の歴史に強い関心を持っていた。そして自分が見聞きしたことを残さなければならないともいっていた。そして遺品の中から見つかったのが本文だ。どなたかが親父のしゃべった話を聞き書きしたもので、横浜や中区に興味のある方には今更ながら嬉しい文である。

### ● 埋地七ヶ町のこと

私は大正二年、当時埋地七ヶ町（不老町・万代町・翁町・扇町・松野町・寿町・吉浜町）と呼ばれていた土地で生まれた、三代目の浜っ子です。今は中村川だけを残して、みんな埋め立てられてしまいましたが、この七ヶ町は周囲を四筋の川に囲まれた一角でした。

大岡川にかかる橋を渡れば、山下町の外国商館街、そして勿論港に近い関係で、この埋地には、何らかのかたちで、輸出入に関係のある仕事を持つ人々が数多く住んでいたのです。

外国商館へ納入する輸出品の陶器、漆器、絹織物を扱う店、また木綿、ちぢみ木綿の加工所も多く、その中の一軒が、後に「横濱浮世絵」のコレクションで有名になった丹波商会です。加工所といっても皆規模の小さい、家内工業的なものばかりでしたね。

次には輸出用木箱屋、現在（いま）のようにコンテナなどない時代ですから、輸出品はみなこの木箱に入れて積み出されたのです。木箱の専門店は、住吉町の渡辺、中華街の隅田など約六軒ほどありました。後述しますが、私の父はこの木箱に関係のある輸出梱包の仕事を請け負っておりました。

この埋地には又、港へ働きに行く沖仲士達が寝泊りする人足部屋も建ちならび、それぞれの組の親分が取り仕切っていました。

現在市役所のあるあたりには、明治の頃から魚市場があり、ここへ通う仲介人の多くも又この町の住人でした。

つまり七ヶ町は横浜の下町を形づくる活気のある庶民の町だったのです。

その時分、路地裏を駆け廻って遊んでいた子供達が、別れ際に交わす「アバヨ」の言葉は土地柄から云って、居留地のフランス人の「アヴォアール（さようなら）」からきていたのではないかと私には思えるのですが・・・ 戦後、「バイバイ」が日本語化してしまったようにね。

余談ですが、私の通った寿高等尋常小学校は、大正八年の埋地の大火のあと、鉄筋コンクリート三階建て、コの字型の校舎として再建され、これは、時代からいって日本では初めてと思います。その後震災にも戦災にも倒壊せず残っていましたが、先年区画整理のため、取り壊されてしまったのは卒業生の一人としては本当に淋しいことです。

### ● 居留地に住んでいた頃

居留地のことを書いた本は沢山ありますが、其処に住み寝起きた経験を持つ人は少ないのではないのでしょうか。前述の埋地の大火で焼け出された父は、荷造業だった関係で、山下町49番のクーパー商会へ蔵番として住み込み、私共一家は、一時期居留地内に住むことになりました。私が六才の時です。

商館の倉庫の、二階の板の間に六帖の畳を敷いて、家族も一緒に暮すことになったのです。現在の上野運輸KK本店の位置で、前に赤レンガ二階建のシンガーミシン日本総代理店がありました。道路を隔てたすぐ隣りが、現存する48番ヘルム・ハウスです。

このあたりは、昼は商売に忙しい人々の出入りの多い街ですが、夜になると商館主も蔵番だけを残して山手の住居に帰ってしまいますから、ガス灯だけが灯（とも）る人気（ひとけ）のない淋しい街になります。附近には食物（たべもの）を売る店も、無論ありませんから、母は橋を渡って埋地へ毎日お菜を買って通っていたようです。おとな達がみんな忙しい居留地では、私の遊び相手など一人もなく、昼は棧橋へ魚釣りに行ったり、女工さん達が立ち働く倉庫へ入って遊んだりしたものです。

以下はそれ以後私が見聞きした、居留地の有様です。

### ● 弁当屋のこと

大正時代には、居留地には、食堂や、それに類する店はありませんでしたから、商館勤めの人達の昼食を運んでくる弁当屋という商売がありました。現在のように、他処（よそ）で作った弁当を届けに来る訳ではなく、館員の人達の家々を廻って手作りの弁当を受け取り、お昼に配って歩く、いわば便利屋みたいなものなのです。車に積んでこられた弁当には、届先の名前、（例えば何商会、何々様）と書いた木札を下げてありました。届けてくる弁当箱は、今も見かける瀬戸物の重ね鉢で、必ず木箱に納め先の名札が下げてありました。一軒あたりいくら位で請け負っていたのか、子供の私にはよくわかりませんでした。多分一ヶ月五十銭位で、一円とは取っていないのではないのでしょうか。無論、弁当運びを頼むことの出来るのは、商館勤めでもある程度の地位の人達だけだったのでしょうか。









- ★ブルー・バード (後のオリエンタル 今のYMCAの先、住吉町一丁目一番)
- ★メトロポリタン・ダンス・ホール (弁天通一丁目の旧露路裏)
- ★カールトン・ダンス・ホール (真砂町二丁目の裏通りの角)
- ★太平洋 (パシフィック) ダンス・ホール (中華街内 山下町15)
- ★金港ダンス・ホール (伊勢佐木町通り喜楽せんべいビル四階)
- ★東横ダンス・ホール (東横線元住吉駅附近)

その頃のダンス音楽は、ワルツ、タンゴ、フォックストロップ、ルンバでした。生演奏はダンス・ホール以外では、やっていけないという条例がありましたから、好きな音楽を聞きたくて、よく通いました。チケット一枚では一曲 (三分) しか踊れないのですからラーメンが十銭で食べられた時代には、仲々金のかかる遊びでしたよ。チケットの裏にダンサーの顔写真が印刷されていたのを、戦前派の中には懐かしく思い出される方もいます。

## ● マスコットと開化亭

亡くなった小説家の大佛次郎は、開化の横浜を舞台にした小説をいくつか書いていますが、昭和のはじめにニューグランドホテルを住居のようにして、執筆していました。

日本大通の現在日銀の横浜支店になっているあたりに「マスコット」(\*注釈) という店があり、私も時々行ったことがあります。彼をちよくちよく見かけました。大抵北村小松と一緒に飲みに来ていたようです。この「マスコット」を舞台にした小説に「愉快的仲間」というのがありますが、その本の扉に載っている絵は、この店の壁にかかっていた絵です。店主はもと、フランス領事館で通訳をしていた人で小さな店でしたが、当時の文士達に愛されていたようです。

開化亭は、戦災で消えるまで不老町にあった明治以来の古い西洋料理屋でした。市役所の先の橋を渡った向こう、角に郵便局があり、その隣にありました。

むかしから“いんごう屋”で通っている、一風変わった気骨ある親爺さんの店でしたよ。店は普通のしもた屋で看板も何もなく、入口の大きな一枚ガラスに。開化亭と書いてあるだけなのです。入るとすぐ土間で一段高くなった処に二帖分位の畳が敷いてあって、ここで洋食を食べさせた。客は勿論座って待っているわけで、「遅いぞ。」なんて注文の催促でもしようものなら、親父が怒るので、みんな静かに皿が出てくるのを待っていました。それで通称「いんごう屋」だったわけですが、美味しい料理を食べさせるので、客は絶えなかったわけです。

相生町一丁目の梅香亭、あれも古くからある洋食屋ですね。

## ● 寄席のはなし

横浜は、むかしから寄席の多い街でした。明治時代から、色々と変遷があったようですが、私の記憶では、埋地を中心として十一軒の寄席があり、それぞれに客を呼んでいました。

むかしの落語家は、東京から毎日通うわけにいかないので、十五日間泊りきりで高座に出たりしていましたね。今の伊勢佐木町四丁目にあった「寿」は浪花節専門で、関東では浪花節を演る者は。ここへ出なければ一人前になれなかったものです。同じく三丁目にあった「新寿」は見番の二階にあり、ここには“野ざらし”の柳好が専属で来ていました。

その時分の寄席は、貸席で興行していましたがどこでも百五十席程の小さな小屋で、他に藝事のおさらい会などにも使われていたようです。

戦前に盲目の浪曲師として有名だった綾太郎も横浜で、はじめは“あんま”として客の肩を揉みながら一席やっていたのですよ。

こんな風に往時の横浜には藝人を育てる土壌があったのですが、もうみんな遠い話になってしまいましたね。

### \*注釈

本の見返し絵が載っているのは北村小松著「呼声」(岡倉書房1937年)で、大佛次郎の「明るい仲間」(杉山書店1942年)の表紙には横山隆一が描いた「マスコット」の店内と思われる壁にも絵が描きこまれている。(大佛次郎記念館の益川良子さんにご協力をいただきました)